
小説家になろう艦隊の系譜

水底に眠れ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説家になろう艦隊の系譜

【Nコード】

N2304K

【作者名】

水底に眠れ

【あらすじ】

スーパーロボット大戦的ななろう架空戦記のクロスオーバー上等であります。まず最初に皆様ごめんなさい

そして、願うのです。早く戦争になあれ♪（おい）

駆け抜ける嵐より、第3艦隊（前書き）

とりあえず例文のようなものをば

駆け抜ける嵐より、第3艦隊

この小説家になろうには多くの架空戦記小説があり、幾多の艦隊が編成され剣戈を交わしてありますが、これはその艦隊そのものに目を向けてみたものであります

例えとしまして拙作の駆け抜ける嵐に、静かな海を、の大日本帝国海軍第3艦隊を挙げてみたいと思います。

第3艦隊編成（2002年1月1日時）

戦艦長門（艦隊旗艦・寺津中将座乗） 陸奥

超甲巡白根 鞍馬

空母信濃（航空隊半壊、再編中） 薩摩

軽巡天龍 龍田 五十鈴

アイギス駆逐艦よいまちづき もちづき ながつき みかづき

駆逐艦たちかぜ なだかぜ しおかぜ

戦艦四隻・空母二隻・軽巡三隻・駆逐艦七隻、計十六隻が基幹戦力となります。

『ありゃ？諸外国の艦はいれないの？それに今回編入された飛鳥とかは？』

『今回は基本となる形を見て判断するらしい。作者によると』

ああそうそう、コメンテーターとして永野と月海の二人に参加して頂いております。

さて、この十七隻、ハイバリューユニット（今後HVU）である戦艦と空母が合わせて六隻存在しているわけなのでありますが、随伴が二隻にすら足りないという体たらくが露見しているわけです。

『増援ないの？』

ありません、この世界は艦隊ごとの独立性ともいうべきセクシヨナリズムがたたっております

『数ヶ月しかたっていないのにぽこぽこ増えるわけあるまい・・・員数外ならともかく』

そんな訳で本編では鶴と外国海軍の出番となるわけです

『本来は四個駆逐隊を軽巡が指導艦として指揮し、防空戦闘を行うんだがな』

『4つ・・・空母に2つ？』

白根級二隻を除いたH V Uを護衛するのが役目だね、白根級は戦艦としては格が下がるけど、外国艦勢を率いるにはうってつけだから。一番すりつぶしがきく戦力というのもあるかな？だからフィリピンに最初は居たりしたわけ

『一番槍は我なるぞ、が戦隊のモットーだったな』

『・・・さすがに一番槍は航空機じゃないの？』

いいえ、必ずしもそうではありません。国際法上公海をどこの軍艦でも通るのは問題ありません。艦隊とたまたま出会った艦隊が、たまたま同じ方向の目的地に行くなんてざらですから・・・一朝時あれば即座にズドン。たとえ沈められても空母か戦艦に傷を負わせれば大金星というわけです。勿論第三艦隊もH V Uを射界に入れないようやってるわけですから、案外航空戦よりも戦争の端緒は砲撃戦という事態であるほうが高かったりするのですよ

『針路を妨害しあうその様は刀の打ち合いに似ていることからつばぜり合いなんてもいうな』

『衝突、なんてのも割とあるんだっけ？』

あります。そんぐらい許容範囲です。死人もときたまでるくらいですし、ある意味実戦ですな。

『しかし、コメントしろといわれても、それほど特筆したものもなく、他の作者さん達が出してるような超兵器もなく、面白みにかけるな』

与えられるだけの戦力与えられて勝つなんて面白くないし、そうであるならば名将や勇将になれる人間なんていくらでもおるわ

『……いっぱいあっても勇将や名将になんぞなりたかないぞ。年次で昇進できればそこそこ……』

『まあ戦時だし、死ななけりゃ御の字？』

……ま、普通はそんなもんよな。普通の艦隊が普通に戦って普通に苦戦する。それが第3艦隊なのよな

『低烈度紛争に第一陣で駆けつけ、国家が死なない程度に処理する。故に半殺しの第3艦隊』

『敵前線に近いから、開戦と同時の核や戦闘のために戦力半減はまぬがれない、半殺しの第3艦隊』

第3艦隊の艦隊旗は、朽ち無しと死人に口無しをかけて梶に今決定しところか

『『いまさらかよっ!』』

世界は広いんだ、設定が追い付かないことぐらいあるさ

『ちよつとまで、艦隊旗と今言ったが、艦隊旗なんて帝國海軍にあったか?』

『大和が八幡大菩薩ののぼりを掲げてたなんてのは聞くけどねえ』

え? え? (汗) ほら、地中海艦隊旗とかあるじゃん、NATOの

『ありゃ条約連合の艦隊としてのそれだから、帝國海軍の第3艦隊が、となるとさすがにまずだろう』

つつこみが厳しいです。そんなよいまちづきには廃棄物13号に登場したDDLの称号をうおおおっ! (殴られ)

『わたしの乗っている海燕はレ○バーじゃないっつもの! ないっつもの!』

『大事な事なので二回言いましたか、わかります』

陸の一作目、空の二作目に続けて期待してたら地味でしたからね、わかります。地味は嫌ですよね、わかります。サブマリ〇707のRじゃなくてロリコンのLのほうが海燕は近いってメメタア（永野から殴られる）

『君のドックに入港したいよ、と、晩ご飯までにお帰りになりますの？だ！このロリコンどもめ！』

タタンッ！（銃声）

『悪は滅びました。というより、これから他の作者さんに挨拶まわりするっていうのに・・・』

サーセン、実際はフ〇メタの水中戦闘機に古い鉄（ドイツ語）の杭打ち機をつけてスペックをフルダウンしたかんじです。実のところ二等〇士物語のヤシガニがベストなのですが・・・（流血中）

『28ノットで六時間、コンバットムーブに二時間分消費するとして、往復二時間・・・活動範囲は55キロ届かない』

『本来はたくさん展開して複数方向角から魚雷で狙うことで命中確

立を上げるツールだもん当たり前じゃん』

あ、ちなみにうちの世界じゃかなり潜水艦は日陰者です。ええと・
・かなり話が脇にそれてしまいましたが、艦隊に関するアレコレを
今後は考察してみていきたいと考えております。大変身勝手な企画
とは思いますが、作中の各艦隊の役割や世界観の一助になれば幸
いです。もし、仮想で戦ってみたいという奇特な方がおられたら、
是非ご連絡を

機動戦艦紀伊VSドゥーチェ〜パスタ、覚えていますか?〜（前書き）

このエピソードは草薙先生のご好意により掲載させていただいて
るものです

機動戦艦紀伊VSドゥーチェ／パスタ、覚えていますか？

ドイツ艦隊と英米連合軍との決戦を控えた航海中のある日、この機動戦艦紀伊の艦魂である凜は、忙中閑あり、といった状態であった。そこで艦内をぶらついてたのだけれども、勝手知ったる自分の艦だ、行く所もなくなってしまったのである

『あゝっ！ヒマーツ！なんでこんな時に暇になるのよー！』
勝手なことも、うかつなお喋りも出来ないし

『うーん。あ、そうだ！あれなら！』

どこに置いたっけ、あれは

『あった！』

ヘッドマウントディスプレイ型のゲーム機を見つけだしてかぶる。

そしてスイッチオン！

『えっと、データデータ、あった！』

未来世界の日本で造られた紀伊だけれども、

いつでもかつでも演習を実際に行うわけにもいかなかったので、シミュレーターがつくられたのだ。艦魂のみんなで戦ったり、チャット気分で繋げてみたり、楽しかったなあ・・・

『あ、明のデータだ』

今は亡き妹の・・・データがあるから、僚艦として設定できる。明は少なくともここでは生きていけると言えるのかもしれない。だから、その設定でスタートボタンを押してみた

パアアアアアッ！！！！

かぶったHMDの画面が光に溢れる。ちょ、壊れてる！？

『まぶしっ!』

『目がっ!目があゝ!』

のたうち回る。待って、声が一人増えてる

『……』

『……』

チカチカする目をしばたいて相手を見る……まさか、明が!?

『……誰よあんた』

そんな事はなかった。誰かわからないけれども、どっかの戦艦の艦魂だ

『あらら?こんな設定あるの?最近のゲームは凄いのねえ』

それはこっちの台詞だ、このゲームに無断で入ってくるなんて!

『ちよつとあんた!誰よ!』

ええと、データ照合して、と。はあ?艦名はヴェニト・ムッソリーニ?ムッソリーニ!?

『あらあら、紀伊さんなの?でもずいぶん武装がすっきりしちゃったのねえ?縛りプレイなのかしら?』

ちよ、ちよつと!触ってこないでよ!縛りプレイって!

『へ、変態!ド変態!私にそんな趣味はないわよ!』

『……貴女、紀伊さんじゃないわね。少なくとも、うちの世界じゃない』

急に変態の声色が変わった。なにやらあちらもデータを見ている。

今のこちらの世界のつてどういう意味よ

『私はイタリア王立海軍戦艦、ヴェニト・ムッソリーニ、セレナかセレネと呼んでください。よろしくね♪』

『……日本海軍の機動戦艦。紀伊、よ』

互いに自己紹介する。イタリア王立海軍?敵じゃないの!たぶん・・・(汗)まあどうでも良いわ、明が出てくるかも、と、ちよつと期待していた自分が腹立たしいし。八つ当りしてやる・・・!

『ええと、何がどうなってるか知らないけど、戦うのかしらね?設

定じゃそうなってるみたいだけど』

『さっさとやりましょ、あなたみたいな普通の戦艦が、私に勝てるわけないですけど』

どうやって痛め付けてやろうかしら？一応46センチ砲を持ってるみたいだから、不用意には近づかないようにしてっと

『すごい自信ですね・・・それじゃあはじめましょか♪』

最初の戦闘距離は4万メートルね。戦艦同士戦うにはそこそこの距離かしら、流石にこっちはアイギスもあるし可哀相だから、一発は撃たせてあげましょ

ドドドドドド！！！！

あ、言ってるそばから撃って来た。弾は結構バラけてる。私の正確な射撃には到底かなわないレベル。さあて、どう料理してあげようかしら

ピカッ！ドオオオオン！！！！

『きゃっ！？キャアアアッー！！！！』

いきなりの閃光と爆風、そして熱。これはもしかしくなくても！

『ちょ、ちょ、ちょっと！セレナとか言ったわね！待ちなさいよっ！いきなり核攻撃なんてありっ！？』

緊急で通信を繋げる

『はい？だって、紀伊さん40年も先の未来の戦艦なんでしょう？
見せていただいたデータからしても、凄い性能じゃないですか』

セレナとか言った艦魂は嫌味でなく、普通に言っただけ

『そんな相手に、なんで核を使っちゃ駄目なのですか？』

『そ、それは・・・』

凜は言葉に詰まる。自分で言っておいてなんだけど、今度の決戦じゃ私が積んでる核ミサイルを使うことになるかもしれない。でも、核をどう使って戦っていくかなんて考えてもなかった

『だったら、私も使って良いのよね？』

もうちょっと考えてみるべきかも

『えー？勘弁してもらいたいなあ、たはは。まあいいや、たぶんあたしの性能諸元よく見てなかったんだと思うけど、私も核砲弾はあと8発あるから・・・存分に戦いましょう？』

最後に存分に戦いましょうといった彼女の笑みは、妖美と言って良
いほど研ぎ澄まされていた

『ええいっ！』

侮ってた。ううん、侮り過ぎてた。簡単に片がつく相手じゃない！

ドン！ドン！ドン！ドン！

距離をもっと取るべく、セレナから離れながら紀伊は46センチ速
射砲を放つ。演算計算はバッチリ、あの女の針路上に間違いなく当
てられる

『うそおっ！』

ぎりぎりのところで避けられた。30ノット出でない船に！

『あまりに射撃が正確すぎるわ。故に読みやすく避けやすいの。針
路上の定点にその着弾予想地点が重なりまくってたなら、回避ぐら
いします』

それに紀伊より加速性能はどうしようもないけれど、舵の利きに関しては有利だ

『くうっ!』

そうだった。私がつってる単装砲と較べて、三連装三基持ったまま改装された過去世界の撫子が、対艦戦闘の攻撃力じゃ私より上なんて言われてたけど、こういう事なのね! 包み込むようなバラけが足りないんだわ・・・!

それに、相手は時代が古いとはいえ40年ぐらいの前であれば、対砲レーダーぐらい持つてる。弾道観測で弾着予想地点を避けるくらいはするわ、確かに!

『では、次はこちらから』

セレナはそういつて重鉄扇を広げてこちらに向ける

ドドドドドド!

あっちの主砲弾だ、もしかしたら核砲弾かもしれない。弾が結構バラけてるから、むしろ厄介。だって、どの砲弾が通常で、どれが核砲弾なのかはわからないのだから、全部が核だと思って対応しなきゃ・・・!

『もうっ!』

舵を切る。近づくのは良くないと思ったから、もう一度離れるように。そのせいで単装砲の射界から外してしまうけど、仕方ないわでも、私の攻撃手段が失われたわけじゃない!

『対艦ミサイル用意!』

いくら撃てばいいかしら? セルは130、外置きのランチャーは六基、全部が全部対艦ミサイルじゃないから・・・ええと

『考えなきや』

そう、この後本当に戦うことになるはずのドイツの機動戦艦たち・
・明の仇を取るのだって、それだけじゃ足りない。一隻撃沈して弾
庫が空っぽじゃ駄目、無駄弾は撃たないようにしなきや！

『・・・ふう、上手くいった、かな？』

あの紀伊さんは最初に撃った核のおかげで距離を取りつつある。も
し至近距離での戦闘であれば、あの速度で砲塔の旋回がおっつか
なくなるころだった。もちろん自爆覚悟で核使ったり、偶然の零距
離射撃で差し違えられなくはないんでしょうけど

『それじゃあ駄目なのよねえ』

いかに自分の戦いやすいスタイルに近付けるか。これが一番大事
なの。場を作ると言ったほうが良いのかしら？

『まあ、私だって実際は核をホイホイ使う気はないんだけどね』

ああでもしなきや、あの娘の性能に対するブラフにならないもの。
一度は使わなきや

『今の態勢で彼女に残された有効な攻撃手段は一つ』

ピピピピッ

ミサイルによる飽和攻撃・・・！

『あの娘なら！』

おそらく次は、全力を投入してくる。だったら、核砲弾のもう一つ

の使い方よ

『弾種！N弾頭！』

本来ならば随伴艦の対空火力が期待できるので、通常の対空弾頭（ベアリングボール弾）を使用するけれども、40年先のミサイル。ECM能力は絶対的にこちらが不利、ECMで絶対的な要素である出力も核融合にはとてもじゃないけど勝てない。でも、同じ核であればどうかしら！

『アゴーニ！（撃てっ！）』

ドドドドドドド！！！！

轟音と共に、核弾頭の一発と対空弾頭の双方が放たれる

ピカッ！

再び空が光る。この距離だから最適効率での迎撃には程遠いでしょうから

『AAM、CIWS起動！対空戦闘！舵を！』

抜けて来るであろうミサイルに備える。そして、火力の一番発揮できる艦腹を相手にみせる

『赤外線画像によるターゲットイング！』

ラダーが駄目でも、赤外線なら水平線の距離ぐらいの像を拾える！
『・・・え？敵影なし？』

一基も飛行を続けているものはない。いくら核だからといって完全

な迎撃なんて・・・

『かかったわね！虚実織り交ぜた攻撃が出来るのはあなただけじゃないって事よ！』

『なっ・・・！？』

回復してきたラダールのフリップに、光点が何個も点滅する

『VLSの中身がどれがどる何てわかりようがないわ！それに、中身が一発なんて誰が決めたのかしら？』

対空ミサイルのクアッドパック（4発入り。ESSMがそれ）を対空ミサイルと見せ掛けて撃ったのだ。並みの巡航ミサイルより速いからバレるかバレないかは掛けだったけど

『あんたは全力全壊だから引っ掛かった！』

そして、あえて巡航ミサイルに見せ掛けやすいVLAを残した事も凜の中では満足だった。ドイツの機動戦艦には潜水出来る奴もいる。攻撃手段を減らさないように出来た・・・！

『ふふっ！いいわ、だからと言って、なあめえるなあああああっ
！！！！』

セレナはミサイルに対する迎撃を開始する。片舷に設置してあるOTTOメララの5in高角砲と25ミリフラックスが吠え、外置きの八発しか搭載していない対空ミサイルが空を駆ける

『伊達に未来に生きてないわよ！セレナ！』

ミサイルは進路を変えて全て艦首からセレナへとアプローチを行う。どうしてもそちらは主砲があるために、対空砲火網に穴が生じる。

それを埋める為に随伴艦が居て艦隊となるのだが、今ここにそれはない

『くっ！副砲！シエルショット！』

迫り来るミサイルに、セレナは副砲に命令を下した。シエルショット・・・砲身から出た時点でボールベアリングを撃ちだすものだ、実際の所葡萄弾に近いが、ホップアップするミサイルに対して装備されたものだが、あくまで舷側にぶっぱなすものであり、正面には

本来撃てない・・・大和級に準じた配置であれば別だったろうが、
あいにくセレナはリットリオに準じた配置である

『くうっ！なめえるなあああああっ！！！！』

セレナの胸元の服がちぎれて飛ぶ。自分で自分を撃ったも同然だ。
しかし、ミサイルはなんとか迎撃に成功する

『悪いわね、こんな所で負けるわけにはいかないの』

この隙を逃す凜ではない。速力を生かして後方に回る。セレナは普通の戦艦、ちゃんとした砲撃をするなら、六門以上撃たないとうろくな観測が出来ない。この位置からならば、一方的に打ち込める

『トドメよ！！！！』

『討とった！！！！』

紀伊の速射砲の果断無い射撃音と、それを見越して待ち構えていたセレナの三番砲塔から一度きりの砲声が響く。背後から日本刀による鋭い突きを繰り出す凜と、振り向きざまに重鉄扇で弧を描くセレナが交錯する

『あいたたた、負けた負けた、すごかったあゝ♪』

結果が画面に出る。セレナの撃沈判定、凜の勝ちだ

『っ、疲れた・・・って！ちよっと！』

『あららららら！』

セレナは今さっき、自分で胸元の服を吹っ飛ばした。そして凜の斬撃を背中から受けたわけで、辛うじて残っていたブラが落ちる・・・
うわぁーい、大きなあゝ♪て、何故セレナさんは自分じゃなくて私を・・・

『きゃ・・・きゃああああああっ！！！！』

最後にセレナが放った砲弾は核砲弾で、道連れを狙ったものだったけれども、急な発射だった事もあり当てずっぽうで紀伊をオーバーハングして炸裂。その後甲板を、多少こんがり焼いた程度だったの

だが、凜はどうなっていたかというところ……パンツじゃ○いから恥ずかしくないもん！であった

紀伊のとある一室

『うむ、まあこんなものでしょうか？草薙先生』

『い、いろいろアウトなのではないでしょうか？あ、録画ですか？バッチリです』

『演習にリスクがないでは、いけませんからなあ。かといって怪我は流石にさせられませんし』

『あとで焼き増しして皆に配ります』

『大変結構。役立ててもらえれば恐悦至極』

ドタドタドタ……！！

破滅の足音が聞こえてくる

『ごるああああああっ！！草薙いっ！またあんたかああああっ！って誰こいつ？』

『げえっ！凜様！』

『これはこれは、水底と申します』

しかし手には先程の二人の写真！

『そ、それは！』

『演習の結果は記録するものです。映像は核を使ったとはいえ、通常型の戦艦でも機動戦艦を苦しめるくらいは出来るという可能性を示すことが出来るでしょう。なにか問題でも？』

『へ？え？うう……』

訳のわからない気迫に押される凜

カチャリ

『相変わらず、変態紳士ぶりにもほどがありますよ、作者』

セレナが拳銃を頭に突き付けて笑う

『・・・これはシナリオに無い出演者ですなあ、セレナ女史。私は両国海軍の親交を計ろうと企てただけですよ。冗談は止してくださいください』

『作者も意外と甘いようで』

ダンッ！

水底さんは（頭が）ログアウトしますた

『さ・て・と♪』

ピツと広げた重鉄扇が草薙先生の首元に・・・血がしたたってますよこれ！

『次はありませんよ？たぶん、ね♪』

それだけいって、セレナもログアウトする。なにかを凜に告げて

『草薙』

『は、はいっ！なんでしょう凜様！？』

戦々恐々の草薙先生を余所に、凜は薄く笑っていた。いつかまた、やり合いましょ♪だって。まっぴらごめんよ、めんどくさくてやになっちゃう。でも、そんな相手が居ても少しはいいのかもしれない『疲れたから寝るわ』

決戦前に、張り詰めたままであった凜の気持ち少し和らぐことが出来たのは、果たして幸であったのか、不幸であったのか・・・それは本人にしかわからない

虚神乱舞く南海奇潭く前編（前書き）

この作品は、要塞好きさんのご好意により提供されております

虚神乱舞〜南海奇譚〜前編

＞脆弱な燈火なら要らない、ぬくもりも知らない。逝けば良い、瞳閉じる前に幕を下ろすから＜

ーラストダンスよりー

よいまちづき・C I C

『当該目標を今後はルサルカと呼称する。だそうですよ』

永野はモニターの向こうに映る男に対して肩をすくめた

『ルサルカ？聞いたことないな』

『ロシアの水妖です。サイレーンと同じような系統に含まれましょう』

歌声で水辺に呼び寄せ、海中に引きずり込むあれだ

『悪い、全然わからん』

『ああ、こちらの話で例えられてもわかりませんよね。うーん』

彼の名はビリュー、訓練中だったよいまちづきに接触してきた異世界のデータ生命体だ。魂といって良いのかもしれない

『で、で？俺のことは？』

興味津々といった具合で聞いてくる、いやいや、官の付ける名前に

あまり期待するもんじゃないですよ？

『・・・電子体幽霊だそうです』
ワイヤードゴースト

ビリーの顔が引きつる。特に、拘束の部分で。繋がれてはいないけれども首筋をなでる、なんもついてない。うんうん

『ともかく、戦力的増援はありません。第二艦隊は台湾沖に展開するだけでルサルカとの積極的交戦は避けます』

『やっぱりデータは信用してもらえなかったわけか・・・』

今度はビリーが肩を落とす。相手は全高270メートルに及ぶ、大型海上制圧要塞艦。光学兵器を兵装の主体とし、電磁推進＋アルキメディアンスクリュウというドリル（氷砕船などに活用例がある。これを利用してなら砂浜程度には上陸できるだろう）を推進力として格闘戦すら行う化け物・・・この時代の戦力がどれだけあっても足りないと感じる

しかし、そんなビリーに永野は首を横に振った

『データそのものは信頼されています。現に、ルサルカが台湾海峡の阻止限界点を越えた場合、第二艦隊は全面核攻撃を行うそうです』
『そりゃ核反応弾の連続攻撃は効くだろうがさ』

汚染とかどうするつもりだよ、おい

『・・・今我々が行っている戦争は、火山噴火にともなう非積極的な東南アジアでの人口調整の面があります』

『ゲスいなあ』

つまり、海洋汚染で死ぬ南シナ海沿岸の人間なぞ知った事じゃあな
いってわけだ。ここまで邪悪な味方もないんじゃないかなろうか？

『少なくとも我々が壊滅するまでは待つてくれるだけの寛容さはありますよ』

第三艦隊は緊急展開や低烈度紛争に対する艦隊であるだけでなく、最終戦争に対する最後のセイフティネットでもあるのだ

『たった、26隻の艦隊でねえ』

『・・・その昔、ルサルカ、という妖怪から逃げる為にお守りをロシアの人々は作ったそうです。ニガヨモギを使って・・・別名でチ

エルノブイリというのですが』

あー、なるほど、そういう意味か

『ルサルカを最初の犠牲者が倒してしまえばお守りは必要ないってことかよ』

つまり、俺が倒せといってるわけだ。まあ、それをいわれちゃうと、俺も弱い。なにせ、あのぶっ壊れた廃棄物のデータが、まさか別の世界まで飛び込んで、長い時間をかけてトランス○オーマー的に実体化するなんて考えてもいなかったから

出された起動完了の発信にあわてて考えた対応が、自分もデータとしてその世界で実体化し、破壊すること。しかし時間も規模も足りない（勝つために容量の大きいデータを送ったんでフリーズ寸前？）ので、まずは現地の奴らにアドバイスしていくしかやりようがなかったのだ

『現状で出来る機体で潰せんのですか？』

永野が聞いてくる

『今攻撃くらったら死ぬる。勘弁してくれ・・・とはいえないか』

身から出た錆だ。しかもそれに、周辺域約四億人の緩慢な死がかかっているとすれば、やるしかない

『至近距離に飛び込んでブチかますしかないなあ』

遠距離でやってもいいが、戦域の範囲が広くなりすぎる。唯一好意的に手を回してくれている第三艦隊のサポートを受けなくなるし、周辺都市を巻き込みかねない

『感謝を。では、艦隊司令部につながります。少々お待ちを』

消えた画面に、ビリューはため息をつく。担当の永野とかいう若い士官は悪い人ではないみたいだが、理屈っぽくてなにかと疲れる。そして、自機の状態をチェックする

『接合部しかねええええっ！！！／＼（＾Ｏ＾）／』

簡単に言えばデンド○ビウムのステイメンしかない状況だ。元の化け物ぶりからすれば、罰ゲームもいいとこだ

『これで戦うとか、馬鹿なの？死ぬの？』

妹が聞いたら絶対そう宣う事だろう。だが、だ。もしこれで勝ったならば

『すごい、さっすがお兄ちゃん♪くらいは言ってくれるに違いない』

『・・・』

『・・・』

永野中佐と、ハゲの・・・確か寺津中将がモニターに映っていた

『・・・ど、どこから』

『お兄ちゃん♪の部分からですか』

冷静に小林○志ヴォイスで声真似しないでください

『妹君がおられますか』

『ええ！義がつきますけどね！私たち宙魂には・・・』
照れ隠しに多弁になりそうな所を、寺津中将は遮った

『なるほど、親愛の情があるのなら・・・問題は生じますまい。これを御覧いただけますかな？』

映像が送られてくる

『こいつは・・・』

音声は入っていない。輸送船団だろうか？随伴には・・・はつゆき級のような護衛艦と、ミサイル艇がいくらか

キラッ！

海面を光が凧いだ

ズドドドドド！！！！

その熱量を受けて、一列に水蒸気爆発の水柱が立ち上った。断ち切られるように貫かれた護衛艦と輸送船数隻は一瞬遅れて爆発
ここで護衛が初めて反撃を開始した。ミサイルだ。だが、放たれたミサイルに効果が無いことを俺は理解している。しばらくして、航跡が乱れ始める。ああ、散開して犠牲を減らそうって魂胆か、指揮官はなかなか出来る人間みたいだな

バキヤッ！

だが、遅かった。ミサイル艇が弾け飛んだ。本来であればありえない、蹴り飛ばされるといふ行為によって
そして画面には光が満ちていき、暗転した

『今のは？』

『フィリピン海軍から提供してもらったものだ。彼らはルソン島北部から、火山灰から逃れる民間人の輸送船団を護衛していた。この映像は、運良くその時間帯哨戒に出ていたヘリが回収した』

一般市民だけで軽く二万人を越えて行方不明・・・生存は絶望的だ
『君に疑われぬよう、テロップなぞ入れず、そのまま渡させてもらった』

『わかりますよ、奴の手口だというぐらい』
だが、少し引っ掛かった

『攻撃が遅くないですか？それに、あんなに凶太いものじゃ・・・』
光学兵器はその名の通り、光の速さで飛ぶため発射即弾着が正しい。
チンダル現象を元に見える光の筋は、対象を燃え上がらせ貫通するための照射時間をもたらしたものだ。でも、画像のこれは、あきらかに遅い。物凄く遅い、今計算した。マッハ5くらい・・・下手なミサイルの最高速より遅いじゃないか！

『・・・専門機関で調査してられませんでしたので、これは我々の推測でしかありませんが』

今度は永野中佐が切り出した

『核融合炉は、原理としてプラズマを利用されますよね。おそらくそれを利用したのかと』

ちよっと待てい！

『まさか、内蔵のプラズマを生のまままで放出したって！？』

『プラズマそのものを磁気でコントロールしてるんです。工夫さえ

したら出来る芸当ですよ』

冗談じゃないぞ、つまり、4000度の熱を持った、マッハ5の物体をぶちかまされるなんて！

『それぐらいの速さがあれば、船舶は避けようがありません。ミサイルなら撃墜でもできましようが、プラズマですから・・・理にはなってます』

まあ、光学兵器の常として減衰を考えなきゃいけないより、単純に物ぶっこみやあ良いなんて乱暴で非効率な！

『狂ってるにもほどがある』

『では、我々の上層部が何故狂気で対抗せねばならなかったのかも理解されましたかな？』

狂気には狂気を以て抗う、か。なるほど

『で、自称健全者たる我々はとう戦うのですか？お二方』

二人は画面の前で、にやりと笑った

虚神乱舞く南海奇潭く後編（前書き）

この作品は、要塞好きさんのご好意により、この作品は掲載させていただきます

虚神乱舞く南海奇潭く後編

＞気付いたなら、狂ってしまう程の、秘められた恋心激しくく

ータイヨウノハナ、よりー

南シナ海

《各機、海面高度20メートルを維持せよ》

ビリュウの機体を取り囲むように、碎風（トムキャット相当）36機が飛ぶ

『そりゃ、接合部は微調整に優れるけどさ』

50メートルクラスの代物を海面ギリギリで維持しつつ飛ぶのは、冷や汗が流れる。一步間違えれば海面にぶつかる。もちろん、機体自体は無事に済むかもしれないが、物凄く痛い目にあうだろう

《ゴースト1（ワン）機体があがりつつある、注意されたし》

遠距離から崔雲（AEW）の注意が飛んでくる

『あいよ』

愚痴の一つくらい言いたいところだが、今一番危険な位置に居るのは彼らなので（距離をとりつつ数秒間の間水平線に出て、レーダー等を発信、ルサルカ的位置を把握する事に努めている）さすがに控える

『敵が光学兵器を主体としていることを逆手にとります』

永野中佐はそう切り出した

『ああいった代物は曲射が行えません。ですので、発射孔の高さから水平線下に隠れる位置であれば、いくら威力や命中精度がろうと意味がありません。そして、海面近くを進むことで、常に発生している水蒸気や、濃い酸素濃度での減衰を期待できます』

頷く。撃ち上げるならまだしも、撃ち下ろすのは、光学兵器にとっての鬼門だ。だから、移動速度に馬鹿げた速度と空中行動能力をもっているのだ

『ですが、結局は接近しなきゃですよね』

攻撃にはそれが必要とされる

『いかにも。そこで、貴機に簡易のバリアーを提供させて頂こうと考えております』

『バリアーだって!?!』

こんなぐらゐの技術水準のあんたたちに出来る事なんて

『我が航空隊が特殊なミサイルを発射します。あなたに向けて』

『・・・へ?』

何言ってるのこの人?

『段階的に発射しますので、この計算票の時刻に合わせて速力を一時的に落としてください。近接信管が作動します』

いや、それって。ダメージ受けてるの俺・・・

『弾頭は、フィリピンで採取出来る火山灰のたぐいです』

つまり、火山性の降灰物。既に焼き上げられており、燃え上がるという事に対しての耐性は非常に高い

『普通の爆煙よりは盾になるはずです』

ある種のビーム攪乱幕ってわけですか、それならまあ、いいか

。だけど、どれだけ効果があるもんだかな

《そろそろ時間だ、幸運をゴースト1。全機、全弾投射開始！全弾投射開始！》

《あんたらもな、これより突入を開始する！》

碎風が胴体と翼の下から6発の鳳凰二型ミサイルを放つ。まんまフエニックスミサイルだな、あれだと・・・それが216発、うはっ。贅沢な煙幕もあつたもんだ

『いくぜえ！』

そのミサイルとほぼ同じ速度まで加速する。マッハ4、この世界に存在するあらゆる戦闘機を越える速度を、50メートル以上の大きさをもち機体が發揮するのだ

パ
パ
パ
ッ

ルサルカの方が光る。ま、せっかく用意してもらったけどさ！

『うおおおっ！』

目でアンカー使用の指示を出し（視覚認識の方がレスポンスが早いと思われたからだ）Gに耐える。一気に急減速と高度を海面ストレスに

キュボアッ！！！！

エネルギー砲の直撃を受けたミサイルが爆発する。ううん、エネルギー

ギーの方が強すぎて、あんまり減衰してないように見えるんだが（汗）

《ゴースト1！作戦どおり動いてください！ミサイルが！》

《いや、やっぱりぶっつけ本番は怖くて、さっ！》

無線中もあつちはぶっぱなしてくる。六本のアンカーを駆使して波の影に入り込んだり、あえて自機のエネルギー砲を海面に叩きこんで水蒸気爆発を起こさせて楯に利用する

よいまちづき

『すごいな、本物のUFO並の機動じゃないか』

彼が自分達の策を使ってくれなかったのは少々不満だが、見せ付けられるその性能には驚嘆を隠せない

『ゴースト1がまもなくルサルカへの攻撃可能範囲に入ります！』

うん、これで至近に寄れたなら、サイズの違いで翻弄出来るに違いない

『電波状況はいいな？観測は間違い無いか？よし！』

I F F代わりの発信機の状態を確認する。

『艦隊司令部より命令！全弾斉射！全弾斉射！』

鷹野一水が振り返って叫ぶ、よし

《ゴースト1！ミサイルによる最終支援を行う、決めてくれ！》

第3艦隊各艦より対艦ミサイルの噴煙が立ち上る。巡航ミサイルだから早さはそうでもない、だが、こいつらのその遅さ故に出来ることがある。それは

『巡航ミサイル！？いまさら！？』

Gに耐えながらビリューは今度こそ呆れかけた。あんなものに何の意味があるのか。確かに迎撃してくれたならば、支援になるが、このルサルカにしてみれば、ただ転移タイプのバリアを張れば良いのだ
『いや、そうか！』

第3艦隊が放った巡航ミサイルがとりはじめた軌跡を予測してビリューは唸る。こりゃ、ルサルカの正面一面に等間隔で突入するように撃ってやがる。間隔の幅は、転移する空間の広さ。目の付けどころが変態過ぎないか！？

飛来した物体を空間を切り裂き、転移させて回避する。では、その切り開かれる空間が自機並に広くなったならば？

それこそ、自分が引き込まれてどこかに転移させられてしまうだろう。いや、切り開く時間が短かければ、その断面で切断されてしまうに違いない！

そこまで思考がいつて、ビリューは初めて第3艦隊に恐ろしさを感じた。なんなんだこいつらは！

パシユウッ！

ルサルカもその事に気付いたのか、ミサイルの迎撃に砲門を向けようとする。しかしそうなる、ビリューを内懐に入り込まれてしまうだけの隙を与えてしまう

『よおっし!!貰った』

《お兄、ちゃん？お兄ちゃん、なの？》

『なっ!？』

唐突に聞こえてきた女の子の声にビリユーは思わず機体の足を止めてしまう

《どこにいるの？私を一人にしないで、私を置いていかないで、私を、私を・・・》

モニターにノイズ混じりに映った姿は、どこか置いてきた妹に似ている。まさか・・・まさか!

《ルサルカ!聞こえるか!?俺だ!ビリユーだ》

艦魂が宿ったなら、説得してどうにか

《いかん!ゴースト1離脱しろ!》

永野中佐が叫ぶ

『へ?』

《私を捨てたお兄ちゃんなんか、死んじゃえええええっ!!!!!!!!!!》

巨大な核融合炉直結のプラズマ流、やべえ!

《あはっ!あははははははっ!死ね!お兄ちゃんなんか死んじゃえはいんだ!》

機体を全速力で後退させる。幸い、下手なミサイルより遅い（マッハ5だが）シロモノなので、即死は免れる

《よりにもよってヤンデレかよおおお！》

しかし、至近で撃たれたので、避けるために方向を変えるだけの暇が無い

《まだデレてないから病んでるだけだな、ゴースト1》

《こんな時に落ち着いてつつこまないでくださいよ！中・・・佐？》
画面の前の中佐の顔が腫れあがっている。

《射線上には我が戦隊がいる。幸い、本艦は水中への退避手段があったからな・・・女性優先で出した》

《・・・》

笑えねえ。プラズマを避けようが無いじゃないか、この人たちは

《そこで、可能性を我々は提示したい》

データが送られてくる・・・これは！

《貴機ならばこのまま飛び続けさえすれば、地磁気によりプラズマのコースは逸れ、回避できるだろう》

あんただけなら生き残れる。そう言いたいのかよ、中佐

《・・・》

《時間が無い、通信終わり》

一方的に切られた。まったく、ずるいにも程があるぜ・・・しかし、時間もない

『し、仕方ねえなあ！くそっ！』

覚悟を決めて、データに機体を合わせる。こんなもの、いったい何時の間に用意したんだ？

《アハハハハッ！！！！死んじやえば良いんだ！アハハハハッ！！！！はあっ、はあっ》

ルサルカが笑い疲れて息を継いでいる。いや、あいつ、原子炉の全エネルギーをぶっこみやがったのか！いや、関係ない

ギョオオオッ！！！！

無理矢理なマニユーバで正面に向き直る。目の前には画面いっぱい
のプラズマ流・・・ごめん、ちびった。ちびれないけど

「Link Connected・・・」

アイギス艦から通知が送られてくる

『効きゃあしねえんだよ！そんなもんなあ！』

パシユウウウン・・・

《・・・え、え？》

巨大なプラズマ流が上空に弾かれて宇宙空間へと消えていく

アイギス艦の出力は、ビリユートの機体やルサルカに遠く及ばない。
だが、そのレーダーは電磁波の位相を自由に操れる。だから、彼女
達を並べてビリユートと同調させたならば、シールドの拡張モジュー
ル足りえる！そうなればプラズマは、ひたすら磁場の等圧線にそっ
て空の彼方へ消え去るしかなかったのだ

勿論、軽金属製の現用艦艇の船体は、輻射熱に耐えきれない。ゆえ

に一度きりで全艦炎上するしかないのではあるが

《・・・あ！》

《もう、遅いっ！》

そして、融合炉が一時停止に陥っている時間は、ビリューにとっては十分すぎるものだった

『ぼっちリディスタンスゼロ、こいつじゃ何しても無駄だぜ？』

連装の28センチエネルギー砲を押しつける。文字通り密着した状態では、どんな装甲も防御装置もあったもんじゃない

『アンカーロック！これで身動きもとれまい！』

さすがは結合のための機体、自分よりも大きなものをつなぎ止めるのはお手のものだ

《・・・ご苦労だった、ゴースト1》

《あ、中佐、無事だったんですか？て、あれ？》

バリアの拡張モジュールとなったアイギス艦は、それぞれもなく炎上中である

《本艦はアイギスが抜かれるからな。それでも小火災とかが報告されているが》

《そりゃご苦労様です》

そこで会話が途切れる。そして二人同時に切り出した

《撃沈か早急な武装排除を願います》

《こいつは俺がお持ちかえるぜ？》

そして再び沈黙したあと、お互い苦笑しながら頷いた

《やはり、ですか》

《そりゃあね》

破壊時の破片でも未来技術の塊、残していくわけにもいかない。当然の話だ・・・それに、妹だしな

『あ、あ・・・』

『ああ、お兄ちゃんだ。悪かったな、一人にして。ま、それだけで済むとは思ってないけどね』

初めて接触回線で目にする妹の姿に、改めて思う。遠い昔に攻撃を受けて、起動する前に止むを得ずデータボックスと共に廃棄された彼女

戦闘中の切り離しということもあって、バリアの断面に飲み込まれてしまい、結果として違う世界に飛ばされて、起きた時には一人でもわりには誰もおらず、ずっと何も理解できぬまま身体を癒すしかなかった・・・自分を捨てたのであろう俺への憎しみを糧として。それじゃあこのまま死なせるにはあまりにも惜しい

《・・・ブジニ、カエレルトデモ？》

永野中佐の言葉に殺気が籠もった・・・怖え！

《帰るさ、あんたはわかつている》

《それは、どうかな？》

永野中佐のよいまちづき、その後方の寺津中将の主力部隊からミサイルアラートが鳴り響く

『お、お兄い』

『これ、急いで！』

ルサルカ・・・ちゃんとした名前、聞かなきゃな。に、指示を出して安心する。間違いなく中佐はわかっている

《中佐》

《最適効率の攻撃を行う、ルサルカだろうと、君だろうとな・・・さよならだ》

巡航ミサイルによる、バリアでの自傷誘発攻撃。この状態での迎撃は確かに難しい。だからこそ、ごまかせる

『こっちにデータを移したか！？』

『う、うん!』

そう、ちゃんと制御したならば、このバリアは違う世界への出入口となり得る。勿論、偶然の奇跡からこっちの世界に来たルサルカのデータがあるからこそ出来る、出来レース

ブォン・・・!

時空を切り裂くバリア展開時の重低音。それが、この南海にまき起こった虚神の、騒がしいだけ騒ぎまくった乱舞としては、割とあつけない幕引きであつた

その後、ビリユースide

『で、連れてきたと・・・』

ビリユース正座です。正面には怖い顔をしたファナがズーンとプレッシャーをかけてきております

『だって仕方がないじゃないかー!』

部品一個だってあっちの世界じゃ大変な事になりかねない。こうするのが一番だろうよー

『露出趣味の艦魂なんて要りません!』

ちなみにルサルカ、名は身体を表すというか、実際のルサルカの伝承にある姿をしております・・・霧を纏った全裸娘でした。ええ、鼻血ものでも

『え”ーっ!?!?・・・はい、すいませんでした』

ギロリと睨まれて恐縮する。こっちでも妹に殺されかねないってどんな罰ゲームよ

『・・・で、今は?』

『眠ってるよ、ようやく本来の意味で収容されたんだ。修復だってメンテナンスだって、ちゃんとやってやれる』

ビリュウの言葉に、ファナはため息を吐いた。まったくこの人はもう『で、で!記録データ見た!?俺あれだけでも戦えんだぜ?』

『はん、サポートが良すぎでしょ?お兄ちゃんあれがなきゃ、七転八倒しかしてないじゃない』

さすが飛魂、フライトアクションに関しては評価が厳しいです

『でも、ま、お兄ちゃんにしては頑張った方じゃないの?』

もともと、そういった機動をするようには出来ていない。宇宙空間に居るときは海面に突っ込みかねないなんて考えないだろうし

『やっとなめてくれたよう』

『ちよ、泣かないでもいいでしょ!』

どうもこちらはいつもどおりのようです

永野side

《永野中佐、君の思うとおりになったな》

《寺津中将、私にそんな権限も強制力はありませんよ。それに、攻撃を行ったのは中将ではありませんか》

たとえば、ビリユーやルサルカの欠片が回収された場合、その合金や構造情報は帝國に多大な利益と優位をもたらしたろう

《だが、それをしなかった》

《フェアではありませんから》

永野が微笑する。この世界の事は、この世界の人間や物で決着をつけるべきなのだ

《だからこそ、第3艦隊にいるのかもな、君は》

寺津も微笑む。その時、コールが入った。

《参りましたね》

《ふふ、ではな》

寺津は回線を切った

『・・・やあ、諸君困ったぞ。女性陣のご帰還だ』

死ぬつもりで送り出したのに、どう出迎えたものか

『もう遅いわよ』

『え?』

振り向くと月海のこ、こぶしがああああ・・・

『艦長の所は愛が痛いな』

『水雷長、收容のこと時間差つけて報告しといてそりゃないでしょ』

あ、血の雨

『世はすべて事もなし』

この事件も忘れ去られていくのだろう。今は戦時なのだから

またいつの日か、彼らが訪れるまでは

将斗ご一行新婚旅行中（i n唄う海R）前編（前書き）

この話は、零戦さんのご好意により、創作させていただいたものです

将斗ご一行新婚旅行中（in 唄う海R）前編

1942年11月22日・ヴェネチア

『うおおおっ!?!?』

『きゃああああっ!?!?』

ヴェネチア名物の水上バス。その中に将斗達が光と共に転移してきたのは、まったくもって気紛れな神様のせいだった

『新婚旅行どこにいこうか?』

『あんまり軍艦で乗り付けるのは問題じゃないの?』

『観光地行きたい』

『大戦中に行ったのインドやアメリカ止まりだからヨーロッパがいなあ』

『その願い! 聞き入れた! というわけで、行って来な』

『ちょ、おまつ!』

というわけで、零戦世界の神様の超なげっぱなし親心で別世界に送られてしまったのだ

『相変わらずやるのが急すぎんねん、あの神様は・・・ん?』

ヒラヒラとメモ紙が落ちてきた。ああ、こっちでの役柄のカヴァー

ストーリーだ

『なになに、慰問劇団？引率の海軍中佐・・・て、サ○ラ大戦かよ！』

はっはっは、あのモギリは13股にプラスαという将斗君らの先達だからねえ

『わーっ！わーっ！外国だよ外国！』

『町並みが奇麗』

女性陣は将斗ほっぽりだしてヴェネチアに黄色い声をあげていた

『・・・コホン』

街の方を見て騒いでいる女性陣とは反対側から咳払いが聞こえてきた

『連絡は届いています。椎名中佐でしたな』

中身の無い左袖をなびかせて、日本海軍の士官が敬礼をした。あ、やべ、肩章は大佐だ

『え、あ、ええと。はい。椎名です』

『志摩といいます。遠路はるばる、お疲れ様です』

答礼を返し、握手する

『ヴァレットから中々降りてこないの、心配しました』

もしかしたら、両替等終わっておらず、ときたま行われる乗客確認に捕まってるんじゃないかとこっちに来たらしい

『はいはい、劇団の皆さんの点呼しますから出て下さいね』

志摩の後ろから、ひょっこりと頭を出して、快活そうな女性が招いた

『奥さんでっか？』

『・・・（でっか？）ええ、桂と言いました。私がほら、これですから。庶務を手伝ってもらってます』

左腕をふる

『翡翠とかはわかるけど、大和やら瑞鶴やら、勇ましい名前がいっぱいねえ』

桂が確認し終えたのだろう。リストを渡しに来た

『いわゆる芸名ってやつですか？』

『そ、そやそや、芸名ですわ』

あかん、普通に艦名で言ってたから全然考えとらんかった

『本名は聞かないでください。それぞれ事情がありますから』

お、翡翠ナイスや！

『・・・わかりました』

その言葉に、志摩が瑞鶴らを見る目が少しかわった

『どっせええい！』

『ごふおっ！』

ニコニコ顔のまま、桂が神速の正拳突きを志摩の腹にたたき込む

『『『・・・え？』』』

『あつはつはつは、さ、めんどくさい話は抜き！ヴェネチアへようこそ！案内しますよ』

志摩大佐はちよつと泡吹いて座り込んでるんですが

『ミスミさーん、みなさんお連れして』

『はい、ただいま』棧橋の方にいた、すげえ、コスプレじゃないメイドさんだ。こうなると我慢できないのが一人

『ふおおおおっ！メイドさんキター！』

『は、はい？』

あーあ、引かれちゃってるやないか

『いい？あの子達はその道を選択できたの。哀れでもなければ、可哀相でもないの、いいわね？』

『・・・わかった』

なんか、盛大に誤解しとかんか？志摩大佐達

『お待たせしました。行きましょう』

ま、ええか。ややこしくなりそうやし

『まずは腹拵えをしましょう』

『『『さんせーい！』』』

女性陣はのんきなものである

レストランテ・カルヴァネーレ

『では、お好きに召し上がってください』

テーブルに並ぶたくさんの料理に、一同ナイフとフォークで決戦前である

『あれ？あれ？』

『なんや翡翠、これからって時に変な声だして』

翡翠が何か探している

『ピザはどこ？』

そ、そや！何か物足りないと思えば、イタリアの代表的ソウルフードであるはずのピザが無い！

『ああ、あれは南部の食物ですよ。北部、特にヴェネト州のここだと米が結構使われます。リゾットとかですね』

水稻がポー川の存在で早くから行われていた関係だ

『それからウナギ料理もごちそうって意味の言葉に使われるくらい、イタリアじゃメジャーなのよ』

その料理をフォークで突き刺して桂はニヤリとする

『いったきい！』

『『あーっ！！！』』

もきゅもきゅ、ごっくん

『さあさ、食事は戦争よ、食べた食べた！』

『『いただきます！！！』』

『・・・ちなみに奥さん何歳なん？』

『32だ』

志摩大佐が苦笑して皿が舞うテーブルを見つめている

『さて中佐、頃合いだ。そろそろ参戦せんと、食いっぱぐれるぞ』
『そうやな、ほな、いきますか!』

大佐は桂さん（何故かさん付け）がとった料理の皿を一つ奪う

『な、なにをするのよ!』

『皿を空にしてから料理は取れ』

『だが断る』

『ニア口移しでも奪い取る』

・・・大佐が悪乗りした

『キャー!キャー!』

『将斗おーっ!ちよっとこっちにこおーい』

『・・・ん（既に準備できている）』

『せ、せめてあーんにしてくれや、こぼれる!こぼれるっちゅうねん!』

要介護者状態の食事に、今度は将斗が頭を抱える。そして志摩はと
いうと

『・・・』

『な、なにすんじゃー!!!』

『そのまま桂さんごと食べる気だったんじゃないですか?』

耳まで真っ赤な桂さんに、リゾットの皿を顔面に突っ込まれて沈黙
している。つか、ミスミさんその発言はちよっと危ないで

食事を済ませて出入り禁止と共に店を出る

『・・・それで、皆さんの公演なのですが』

あ、やば、公演とか言われても何も出来へんで俺ら

『上は何を考えていたのか、明日は無理なのです』

『よっs・・・な、なんやてー（棒読み）』

『明日はアクアアルタなんですよ』

『アクアアルタ?』

アクアアルタとは、アドリア海の潮位が上がり、ヴェネチアの大部分が水没してしまう現象である。

『こ、この街沈むの！？』

『あ、いえ。生活するには考慮して作ってあるので問題ないのですが』

座礁が考えられるため、ゴンドラや水上バスが運航中止になってしまいう

『肝心の邦人さん方を移動させられんです』

それでは意味が無い

i n 神界

零戦さんとの神『ふふふ、日程をすり替えておいたのさ！』

唄う海とこの神『どこのスパイダーマッド、おまいさんは』

翌々日も後片付けでまず街中がしっちゃかめっちゃかなので無理だろう

『大変申し訳ありません、お呼び立てしておきながら』

『ええってええって、気にしてへん』

むしろ、そうでないと困るがな

『それじゃ！男性陣とは好みが違うだろうから、女の子の皆さんは私が案内するわよ』

『僭越ながら、私も案内いたします』

あら？あらら？

『椎名中佐はカフェでしばらく私と歓談してますから、ごゆっくりえ、ええと・・・いきなり別行動？しかも大佐とさしで？流石に不安が・・・主に翡翠的な意味で』

カフェ・フロリアン

『おお』

サンマルコ広場の由緒あるカフェに、将斗も流石に感嘆する

『それで、中佐は航空屋かな？』

そんな将斗に、志摩が切り出してきた

『え、良くわかりましたな？』

『見た感じが若いからね』

身体の年齢を若くしてもらってるので、そうなるのだろう

『大佐は？』

『鉄砲屋、だったというべきか。腕がこれだからね』

そうそう、気になってたんや

『その腕はどないしたんです？』

『女一人自分の物にするのに必要だったから対価を支払った。それだけさ』

正確に言えば、かばった事になるのだが、そこまでは志摩も言わなかった。ただ、続けての言葉は衝撃的だった

『・・・君は、この世界の人間じゃないね？』

いきなりの核心に、将斗はカフェを吹き出しそうになる

『な、なんのことやら』

『海軍に奉職した場合、まず直されるのが方言だ。当然だ。命令伝

達に支障が出ては困るからな』

いくら航空屋だからといって、いや、航空屋だからこそ、命令伝達には心を配る

『それでいて、連れてきた劇団の彼女達。料理をきちんと食べていた。全員な・・・なぜマナーが出来ている』

料理にわざわざリゾートを選んだのは、日本人が食べ慣れている米類を、とした為だ。海外旅行なぞ、そうそう無いご時世に、全員がマナーを守る事が出来ているというのは実におかしい話だった

『そ、それはみんなお嬢様』

『我々はある意味見捨てられた存在だ、そんな所にお嬢様集団を送るほど我が海軍は優しくない』

・・・何もかもが不条理過ぎた。そして可能性を除去していくと

『君たちはどこから来たのかね？いや、どの世界から、か。大阪弁が標準語という事は、江戸の無血開城に失敗した世界か？』

『違います。あの・・・』

新婚旅行代わりにホイホイ来ましたなんてどう言や良いねん！

『さあて、食い気が終わったら買い気、ショッピング！とまあ、私もあんまりしてるわけじゃないけどね』

『こちらです』

とある店に案内される翡翠達

『ここは？』

『化粧品店よ、まあ、お土産にも、直接使うにしても、服のように嵩張らないで済むし、どうかしら？』

外洋航海や外交武官もお土産として、良くこういったものを購入している。手ごろではあった

『劇団さんなら、化粧品は必須でしょ？』

『えっと。あ、香水だ。本物は初めて見た・・・翡翠、シャネルつて書いてあるけど、これどうなの？』

瑞鶴が小ビンを手取る・・・翡翠さん固まっていますよ

『シャ、シャ、シャネル！？』

『あ、初めてなら。こう使うんですよ？店主さん、いただきますね』
ミスミは店主にことわって、シャネルの香水の蓋を取り、香水を瑞鶴の手首に擦り付ける

『おお！』

『良い香り〜』

『私も私も〜』

『はいはい、ただ今』

そして恐ろしい事に、桂さんまで艦魂のみんなに塗りだす。シャネルを香水を！しかも人数が人数だから

『あれ？翡翠？』

『ば、バカーッ！！！財布考えなさいよ財・・・布？』
値札を見て再度固まった。え、これ、何でこんなに安いのか？

『潰れた会社のもんだからね。失敗した企画の在庫処理だし、ただ同然だよ』

店主が事もなげに言う。そう、ココ・シャネルは1940年にストライキから自分の会社をやめて自堕落な生活をしつつ、あのシェレンベルクの愛人をしており、当時の認識としては、すでに終わった人である

『・・・』

ちなみに、翡翠が化粧品や衣服に詳しいのはやはり、コスプレの為に色々してるためである。あれ、そこそお金かかるのだ。そしてその手間は言うまでもない

『か、買います！全員分とお土産分買います！』

『ちよっと翡翠〜？』

どったんばったんしつつ、買物を楽しむ。ただ、未来を知る翡翠らからすると、化粧品の類は香水を除いてあまりオススメ出来るもの

ばかりでは無かったみたいだったが

『ま、こんなものかしらね』

時計を見て桂が微笑む。あまり待たせるのも良くないでしょ

『皆さん、そろそろ戻りましょう』

察したミスミが声をかける

『そろそろあの二人は場のむさ苦しさにむせび泣いてる頃でしょ』

カフェ・フロリアン

『艦魂、だと・・・？』

後編に続く

将斗ご一行新婚旅行中（i n 唄う海）後編（前書き）

この小説は零戦さんのご好意により掲載しております

将斗一行新婚旅行中（in 唄う海）後編

カフェ・フロリアン

『ええ、神様が近い世界と言っていいかもしれません』

志摩大佐にはこういうしかあらへんやろ、取り敢えずは

『それで、神様が親族になるんですけど、それで』

『ある種の現人神ということか？』

なんか物凄い単語が出てきたぞ、おおい！

『ちゃいますって、そんな大それたもんじゃ』

『良くある類型の一つじゃないかな？神が降りてきて、人間にアドバイスをくれる。マホメットなんかがそれだし、神を依せるなんてのは洋の東西を問わない、むしろ、そうであったほうがしっくりくる』

・・・案外この人話聞いてくれへんなあ（涙）

『そこらへん、詳しいんですか？大佐は』

『まあ、もとの専攻はそっちにするつもりだったし、桂は実家が神社だったからな』

え？それじゃあ

『・・・つまり、巫女さんとメイドさんを両手に花？』

ズダダダダ！！！！

『巫女さんと聞いて飛んできました！』

ズシャアツと、ブレーキ音も付きそうな勢いで女の子が駆け込んで

きた

『翡翠く、最終的には怒るで』

『いやいや、はい、翡翠さん。桂は神社の生まれなので、巫女さんの神事も行えますよ。市舞いとか』

いや、志摩大佐、翡翠はそういうのじゃないんですわ

『という事は、あんな事やこんな事も大佐は♪』

『『『・・・』』』

『ひーすーいー!!!』

しばらくお待ちください

『ヴェネチアは楽しめましたか？みなさん』

『あー、みんなが艦魂やて言うことは、大佐に言ったから、安心しや』

『あ、将斗も言っちゃったんですね？』

瑞鶴が申し訳なさそうにする

『も・・・て？』

『話は聞かせてもらったわよ色男♪』

桂さんに頬をうりうりされる

『全員お嫁さんだそうです。新婚旅行とか・・・』

あ、ミスミさんが言ってはならない真実を志摩大佐に・・・

『・・・新婚旅行？』

『あのー、皆さん出来れば助けてもらえませんかー』

一方翡翠さんというと、私は桃色主義者ですの板切れを首からかけられて、木に括り付けられている

『そういえば、奥様とは長いのですか？』

瑞鶴がスルーして聞く

『実際に結婚したのは九年前ぐらい、前かな。大尉になった年にしたよ』

このぐらいの階級にならないと、結婚できないと思ってたから

『割と楽よく、海軍さんのお嫁さん、てのも。基本的に海に居るかなかなか帰ってこないし、それに、こいつ人付き合いもそれほどじゃないから、飲み会の準備も少ないし、この人は、多少本を買う以外はタバコも遊んだりもしないから』

はう・・・と、女性陣が目をキラキラさせている

『つて、別に大したことしてないわよ、私(汗)』

『いいえ、そんな所帯染みたところ、懂れます!』

瑞鶴の言葉にみんなうんうんと頷く

『あれ? 9年ぐらい前って言うことは23ぐらいって事は、桂さん何かやってらしたんですか?』

就職してておかしくない

『神職の手伝いとかしながらだけど、女性団体に入って事務とかしてたのよ』

・・・女性団体?

『ウーマンリブ、知らないかな? 女性の権利向上のための団体でね』
アメリカ発の女性団体、フェミニズムを広げた運動になる。キャッチフレーズは夫を殴れ

『えらい目にあっただよ』

しみじみと思い出すその頃・・・今とほとんど変わってないorz
『ちよつとちよつと! 私の所はまっとうよ!』

家に長く居ることになる女性こそ、男性に代わり、多くの技術を取
得すべきであり、それを以て対等に働く存在であると認識させるこ
と、それが目的だった

『おかげさまで車やバイクも運転できるし、言語もそこそここなす
わよ』

『それで何々の資格取るたんびに港で待ち構えてんだよな、自慢し

に』

毎回寄港した際に、お連れの方がお見えですと門衛にニヤニヤされるのがどれだけ恥ずかしかったか

『ごちそうさまです』

『追加にスイーツ頼んだ覚えはないで』

終始笑顔で言うミスミと苦笑する将斗

『そういう中佐はどうなんだね』

『あー！聞きたい聞きたい！こんなに一杯どうやったのよ』

アカン、やぶへびやったかも

『翡翠は昔からやし、瑞鶴らは歴史を知るつとるさかい、蒼零は自分が乗る機体やからな。勿論、俺が結婚した理由はそれだけやないけどな』

割とはっきり、将斗は言い切った。

『・・・歴史？』

しもた！いわゆる史実ってのを教えるのはいかんやろ

『ああ、沈んだのかね』

さもありなんと瞑目する志摩

『驚かないんですか？』

『我々の帝國は、異世界に転移する前から、対米戦で長期戦を行えば必敗するというのが基本認識。いや、戻ってきた今ですらそうであるというのがまともな士官の考えだ』

奇跡が起きまくる御前演習ですら、小笠原沖で聯合艦隊は全滅するシミュレーションを嬉々としてしてみせる組織・・・それが海軍ではないか

『死なせず済んで、戦争が終わって、新婚旅行か・・・心底羨ましい、羨ましく思うよ中佐』

将斗は志摩に少したじろいだ、なんだろう。志摩から死臭がした

『死んだらあかで、大佐』

そういわずにいらなかった

『死ぬさ、人はいずれ死ぬ。生きとし生けるものはすべからく、死

ぬ』

それはそうやけど、なんか、今にも死んでしまいそうな・・・

『ま、死なんよ、この二人を助けるまではな』

どこか危うい・・・

『ダメですよ、死んだら』

蒼零が志摩大佐の手を取って抱き締める。そうやな、一回思わず逝く所やったもんな

『私達は兵器です。抜かぬ劔つるぎであることが目とされていますが、抜かば人を殺める事、兵器同士戦う事を存在意義とします』
でも、と蒼零は笑った

『どうしてか私達は実体化して、将斗と結ばれる事が可能になりました。次に何かを為すことが出来るようになったのです』
そうや、まだおらへんが、子供だって

『生きなきゃダメです』

『・・・ご心配、痛み入ります』

志摩大佐は頭を下げた

『貴女は、優しいんですね』

『たぶん、貴方も優しくすぎるんだと思います』

あ、蒼零が照れてる・・・なんや、ちょっと待ちい、なんかいい雰囲気

『志摩く、私達おいてけぼりなんだけどく?』

あ、桂さんのこめかみがピクピク動いてる。怒ってる、怒ってるよあれ

『お、おお、すまん』

『さあさ、つぎ行きましよ』

ヴェネチアガラス専売店

『ここが有名なガラスの売場になるんだけど』

閑散としている。ここがそうとはとても思えへんで

『嗜好品はともかく、高級品はなかなか盛大に売り出すのは出来んさ』

戦時に観光客相手に商売やるわけにもいくまい。伊勢湾での養殖真珠栽培だって、玉より弾をのスローガンで規模を極小にしている

『でも、綺麗・・・』

極薄のガラスを引き伸ばして細工を行うのがヴェネチアガラスのやり方だ。とても繊細で芸術性が高い

『しかし、大佐はなんでガラスに？』

このガラス販売店を選んだのは志摩だった

『艦魂の皆さんに、君のような航空屋、そして私のような大砲屋に共通してガラスは関わりがあるだろうからね』

殆どの艦には測距儀がついている。これが各艦に於いては目にあたるだろうし、大砲屋はそれを用いて砲術を行う

『ああ、照準機や風防のガラスかいな』

『ご明察』

この精度が低いと、命中精度が下がるところか、覗き込む事で視力を低下させる害さえ発生させた

『アンティークを、とは流石に言えんが、どうかな？』

戦時でなければ、応接室代わりである長官公室や艦長室には礼儀をこめて良い調度品を備えているものだ

『手ごろなモノがあれば』

『ん、そうするといい』

志摩大佐が微笑んだ。なんかこう、気風が違うなあ。山本さんとかと一緒にあったけど、あくまで司令部要員の一人やったから、通常

業務にはあんまし関わってへんし

『翡翠、大佐の事はどう思う？』

『え？割とエロい人・・・じゃなくて、よね？んー・・・』

少し考える翡翠、何で首にかけてる（私は桃色主義者です）の板切れをはずさないのかはつつこまへんで

『正直、大佐どまりの人、かな』

『そか・・・』

将官には向いてない。近衛さんみたいな人

『それに臆病な人っていうのを付け加えるべきね』

『うえっ、桂さん！？』

やばっ、聞かれた！？翡翠もあうあうしている

『いいのよ、事実だから。当人も本来なら、お情け少将で退役できたら最高とか思ってた口だし』

お情け少将、退役一年ぐらい前に少将に進級させて手当てを多くもらうようにしてもらったそれだ

『でも、あの人は臆病だから、海軍も私も裏切ることが出来ないの・・・困った人なのよ、ほんっと』

なはは、と桂さんは苦笑すると、翡翠の肩を叩いた

『それからいうと、将斗君はやりやすいでしょ？』

や、やりやすいってなんやねん！

『そうそう、割とあっさり私達を諦めてくれたりするんですよ、

蒼零とついうっかりあの世に駆け落ちしかけたとか』

『それはもう勘弁してください・・・』

結構翡翠や瑞鶴ら艦魂達からネタにされて苦しい。言い訳出来へんし
『ほ、ほら、みんな行ってまうで、オレらもいかんと』

『あー！逃げたー！』

そんなこんなで楽しい一日は過ぎ、リミットである朝まで後少しとなった

『みんな寝たかな?』

『ええ、おおきに、大佐。一日付き合ってもろて』

アクアアルタの夜。浸水した宿舎の一階に打ち寄せるさざ波が聞こえる

『静かですね』

『別れには、良い夜だろう』

『言い合い、お互い苦笑する』

『悪いね、所々で辛気臭い話をしてしまった。史家志望の悪い癖だ』
あらゆる勢力の興廃を見てきた故に

『かまへんて、気にし過ぎや』

『・・・いまさらだが、夫婦というのは良いもんだぞ、椎名中佐』
志摩は将斗に照れながら言った

『あの奥さん見てたらわかりますがな。ミスミさんも』

瑞鶴達もあこがれてた。長年連れ添うような人にはなかなか逢ったことあらへんかったからな

『それだけでも、感謝や』

『そうか、良かった』

二人で笑う。光が将斗に降りてきた

『大佐、これより我々は現隊に復します』

『許可する。中佐、君の人生が良き航海となることを願ってやまない』

敬礼を交わす。おそらく二度と逢うことはかなうまい

『さようなら、異界の旅人よ』

光が消えたとき、そこには何もなく、ただ波音だけがあたりに響いていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2304k/>

小説家になろう艦隊の系譜

2011年4月28日15時58分発行